
heart...

緋彩

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

heart...

【Nコード】

N9152D

【作者名】

緋彩

【あらすじ】

治癒師の修行の旅をするナツとイトコのハルカ、アキヤ。男女3人の関係と、旅先での話を主人公目線で展開。

ブローグ

「ナツー！！朝だよ！！」

毎日同じ声に起こされる。

ハルカの声だ。

渋々起き上がり、服を引っ張り出し着替える。

「ちょっと！！私がいる前で着替えないでよ！！」

だったら早く出ていけよって思いながら着替えを済ませ、部屋を出る。

廊下を歩き食堂に向かう。

「おはよう、ナツ」

「んーおはよう」

声を掛けてきたのはアキヤ。

ハルカと同じ、俺にとってはイトコである。俺達3人は旅人である。

ハルカは母さんの妹の子で10歳。

子供のくせに妙にませてムカツク。

アキヤは母さんの姉の子で19歳。

スポーツ万能、容姿綺麗、眉目秀麗という俺の憧れ。

何でも出来るから言うことなし。

「どうしたのナツ。ご飯冷めちゃうよ」

「…あ！…うん何でもないっ！…いったたっきま…す！…」

「全く…早くしなさいよ」

小煩いチビは睨みつけて無視だ。

「本当、15歳のくせにガキね」

「どっちがガキだ。このチビ！…」

「チビじゃないわよ！！まだ大きくなるもんっ」

「はいはい」

こんなやりとりは毎日だ。

そして大体そこにアキヤが止めに入る。

「はい、そこまで。早くご飯食べなさい。1時間後には出発するよ」

俺達が旅をする理由は、言わば修行である。

3姉妹の母さん達は有名な治癒師だった。

治癒師というのは、気で傷を直すもので、表面的な傷から心の傷まで癒す能力者なのである。

俺達はまだまだ完璧に能力を身に付けていない為に、母さん達の後を継げない。

その為に旅を始めたのである。

心、1つ

「ふあああ……眠……」

「まだ眠いの？ナツ」

欠伸をしながら歩いているとアキヤにそう聞かれた。

アキヤはいつだって優しい。

元々あまり怒らない人だから逆に怒った時は………

……恐くて思い出したくないや……

その点ハルカはガミガミ口煩い。

アキヤにはベタベタしまくって甘えるくせに、俺には文句ばかりだ。

「アキヤ！！あれ見て来ていいっ？」

ハルカが出店を指差し目を輝かせていた。

「いいよ」

「やったあ！！ちょっと行ってくるね！！」

そう言い残しハルカは出店の方へ走って行った。

普段はませた事吐かすけど、ああいう姿はまだ子供なんだなあ、何て妙に微笑ましく思う。

「ハルカもやつぱ女の子だね。ああいうアクセサリーとか好きなんて」

「うん、そうだな」

ハルカが両親と離れて俺達と頑張ってるのは重々承知している。

だから本当はもっと優しくしなきゃいけないんだけど……………

……だけど生意気なんだよっ！！

「ナツも何か見る？」

アキヤにそう問われ、ハツとする。

「ん、俺はいい。アキヤと話してる方が」

「え？」

アキヤがきょんとしている。

俺はその姿が面白くてクスクス笑う。

「どうゆーこと〜ナツ〜」

俺の服を引っ張りながらアキヤが不満そうに聞いてくる。

何でも出来るくせにこういう事に疎いアキヤは、俺にとってすごく可愛い。

「そゆーこと〜」

「あー！！！！ナツ！！アキヤを独り占めしちゃだめー！！」

遠くからハルカの声がする。

頭にはさっきまでなかった髪飾り1つ。

「お前が自分でいなくなっただろ」
「でも駄目ー！！！！」

全く我が儘だ。

「ハルカ、それどうしたの？」
「あつ、髪飾り？」

いいでしょーといいながらハルカが髪飾りを見せびらかす。
蝶々のモチーフで小さな宝石が散りばめられている。
とても美しい髪飾りだ。

「お店の人がくれたんだあ」
「そっか、よかったね」

アキヤがハルカの髪を撫でる。

ハルカはニコニコして嬉しそうにアキヤを見ている。

その光景を見つつ、俺は悶々とした気分でした。

心、2つ

出店を一通り見て俺達はこの街を後にした。
街から一歩離れれば賑わいの姿はなく、緑が生い茂る森になってしまった。

「あの街は栄えすぎて病気や怪我人は全然いなかったね」

「確かに。でもハルカ。それは”見た目”でしょ。心の傷を抱えている人はたくさんいるんだよ」

残念そうにしていたハルカにアキヤが諭した。
確かにその通りだ。

あの街は医療が進歩していて、病気や怪我をした人は最新の医療により回復していたが、心の傷を抱えている人はいた。

ハルカはまだそれには気付けなかったようだ。

「ナツも気付いていたの？」

「まあな」

ハルカが挑戦的な眼差しで聞いてきた。

「ハルカもナツぐらいになれば分かるよ」

「ふんっ！！ナツより早く習得するわよっ」

ハルカは腕を組んで強がってみせた。

「はいはい。せいぜい頑張りたまえよ、ハルカくん」

俺がハルカの頭をポンッと叩いて茶化すと、子供扱いするな――！！とハルカが怒る。

それが子供なんだよな、何て思いながらふとアキヤの方へ目を向ける。

「ん？どうしたの？ナツ」

俺の視線に気付いたアキヤが優しく微笑みかけながらそう聞いてきた。

嗚呼、駄目だ。この笑顔。

破壊力抜群だよな……。

アキヤはブルーの瞳がすごく綺麗だ。

深い海に吸い込まれるかのような錯覚に陥って惹き付けられる。だから今みたいについ見惚れてしまう。

「いや、……いつ見ても綺麗だな、と」

「何が綺麗なの？」

「これだよ、アキヤの」

アキヤの目を指差し少し距離を縮める。

「ナツ……？」

「あー！！何やってんのナツ！！」

（またか…）

少し先を歩いていたハルカが振り返って叫んだ。
いつもこうだ。

ハルカを恨むのは違うと思うが、もう少し報われてもいいんじゃないのかって思う。

これじゃ、いつまで経ってもこの距離は変わらない。

「うつせえなチビ。子供には分からない事だよ」

「だから子供扱いするなー！！」

「2人ともー喧嘩は駄目だって言ってるでしょー」

本当、いつまで続くんだよ、この状態。

心、3つ

あれからまた少し歩いたところで、俺達は次の街が視野に入るところまで来た。

「ところでアキヤ。次の街はどんなところなの？」

ハルカがアキヤを見上げながら聞いた。

「多分、前の街とは全然違うところだよ。荒廃してるって聞いた」
「荒廃？前の街とさして変わらない距離にあるのに何で荒廃しちゃうんだよ」

俺は殊更不思議だった。

近くの街と街にそんな差があるのかと。

「この国は街と街が独立してるからね。いくら近くって言っても経済状況や科学の発達具合は違うんだよ。習わなかった？ナツ」

アキヤが更々と説明するのを聞いて理解はしたが納得はしなかった。
1つの国なのに、その中で独立している街と街。
貧富の差が広がる一方である。

「……変な国だよな」

「まあね、仕方ない。これがこの国のあり方として定着してしまってるから仕方ないよ。大人達はもはやそれが普通になってるから何も言わないし」

普通に…か。

慣れって怖いな。

俺もいつかそうなるのだろうか。

「あつもうすぐだよ」

ハルカが前方を指差すと、街の入口が見えてきた。

だんだん近くなる街。

俺達は啞然とした。

「何…これ…」

ハルカが思わず声をあげる。

ここは本当にさっきまで俺達がいた街と同じ国なのだろうか。

街の入口からして明らかに雰囲気が違う。

寂れていて、空気が重く、何となく空まで不機嫌に見える。

どこの街も多くは塀に囲まれていて、入り口は4箇所ある。

そして必ず、この国の者であるという証を見せなければならない。

その証とはペンダントで雫型をしている蒼い石だ。

これにより人々は国の者かを判断する。

しかしこの街の入り口に証を確認する人の姿は無く、ガランと入り口の門が開ききっていた。

「何かあったのかな」

「そのようだね。いくら荒廃してるとはいってもこれは酷い」

門の奥に見えるのは何か大災害があったのではないかと思うような、民家の崩壊。
人々が苦しみと悲しみに染まっている姿だった。

「酷い……一体これは……」

足を踏み入れるとカチャリと音がする。
割れた硝子が地面に散らばっていて、それを踏みつけたようだ。

「とにかく、街の中央へ行ってみよう。国と繋がる施設があるはずだ」

「そうだね」

俺達が入り口付近から街の中央へと走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152d/>

heart...

2010年10月10日01時46分発行